



校長室だより～湘南の空～

第6号

令和4年4月22日

湘南は、100回生を迎え、新鮮な活気に満ちている。

「多くの方々のおかげで活動させてもらっている。不安な社会情勢の中、私たちの存在は小さくない。皆さんに勇気を与えられるようにこれからも活動していく。」このようなスタンスで部活動に励む生徒の皆さんは素晴らしい。

高い理念・目標を掲げて取り組むことで、活動の意味が増し、かける情熱が高まり、走り続けることができる。生徒の皆さんがやりたいことにのめり込む姿は、周りの人に勇気を与え、やがて時代を変える力になっていく。

今後も日々の勉強・行事・部活動に全力で突き進んでいただきたい。「そもそも湘南ってなんだっけ」「そもそも体育祭とは」というところから積み上げていってほしい。

常に人に優しくすること

2020年4月24日に新型コロナウイルス感染症で亡くなった岡本行夫さん(39回)は外交官、シンクタンク経営、首相補佐官、MIT国際研究センターシニアフェロー、執筆、メディアなど幅広く活躍した。岡本さんが小泉純一郎首相の補佐官として戦後復興中のイラクをまわったときのエピソードを紹介する。

イラク駐留第101空挺師団ヘルミック准将とモスルの銀行を訪れた際、ある婦人がヘルミックに抱き着かんばかりに挨拶をした。婦人は、ヘルミックの部下が武器の捜査で彼女の家に入ったときに100ドル札を盗まれたと訴えたが、部下は、そんなことをするはずがないと取り合わなかったところ、ヘルミックは直ちに100ドルを婦人に渡すよう命じた。そして、ヘルミックは部下に「判断を間違える時は、必ず立場の弱い人の側に立って間違えろ」と伝えた。

また、ヘリコプターに同乗した際、ヘルミックは扉を開け放しで下にいる住民に向かって手を振り続けていた。「いきなり米軍が来て、自分たちの大統領を倒したのに、今は我々の統治に従っているのだから、それに対して心から感謝している。」岡本さんが「下からは見えないじゃないか」と首をかしげると、ヘルミックは「自分の気持ちは必ず彼らに伝わるはずだ。」

岡本さんは、国際人の条件として常に人に優しくすることを挙げ、「自らの

挙措にそれがにじみ出てきて、外に伝わります。そうすると、国際社会に受け入れられる、尊敬される」としている。(岡本行夫講演録「日本にとって最大の危機とは?」)

これは、世界の将来を案じる偉大な先輩から若者への熱いエールである。

憧憬と郷愁

元箱根の海賊船発着ターミナルに程近い高台に、多くの貴重な日本画を所蔵する成川美術館がある。窓からは富士山と芦ノ湖を望み、秀麗な日本画のようだ。ここに東山魁夷(1908年~1999年)作の「泉」が所蔵されている。「都門を潜ると、石畳の道が続いている。古い家々が、どの窓にも花を飾って並んでいる。広場の真中にあるゲオルクの泉。ローテンプルクは、そのままメルヘンの町である。」

魁夷は東京美術学校を卒業して間もなくの1933年に初めてヨーロッパへ旅立ち、ドイツを主な滞在地として、2年間、ヨーロッパの美術の研究と、生活を体験した。その36年後、「京都を主題にした連作と、新宮殿の壁画『朝明けの潮』を、ほとんど同時期に描き終えた時、こんどは遠くの方からドイツの古都が私を呼んでいるのを感じ」魁夷は再遊の旅に出た。

この時の作品を集めた「東山魁夷小画集ドイツ・オーストリア」の前書きに次の一節がある。「憧憬と郷愁、別離と帰郷——それが旅の姿である。しかし、もし、この二つの異なった方向が一つの輪に結ばれていたら、そのような宿命を持つ旅人は、いつまでも輪を描いて歩き続けることになる。」日本への郷愁とドイツ・オーストリアへの憧憬が引力となり、魁夷は、憧憬と郷愁の間を行き来した。無論、郷愁と憧憬の深さは同じ。これが母国の文化と異文化を同じ深さで愛する魁夷の作品の特徴である。魁夷は二つの文化を知り双方に引き寄せられることで、それぞれをより深く理解し、描き切る。

魁夷は「先鋭な意見を聞き、新しい画論を読んでも私自身の内面を深くのぞき込んで、その水底から錘をたくし上げてくるように、自己の形成経路、環境、生活を通じて納得のいくことでないかぎり、身につけようとはしない性分である。」(東山魁夷著「泉に聞く」)このためか、私は、魁夷の作品から深遠な泉のような神秘的な力を感じる。

http://www.narukawamuseum.co.jp/exhibition/ongoing_4.html